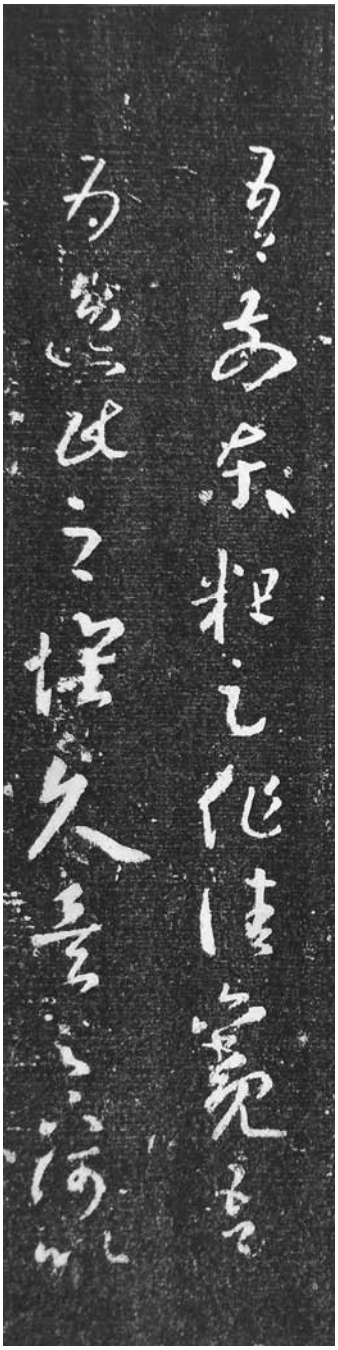
影印「宋拓十七帖」・張伯英跋本

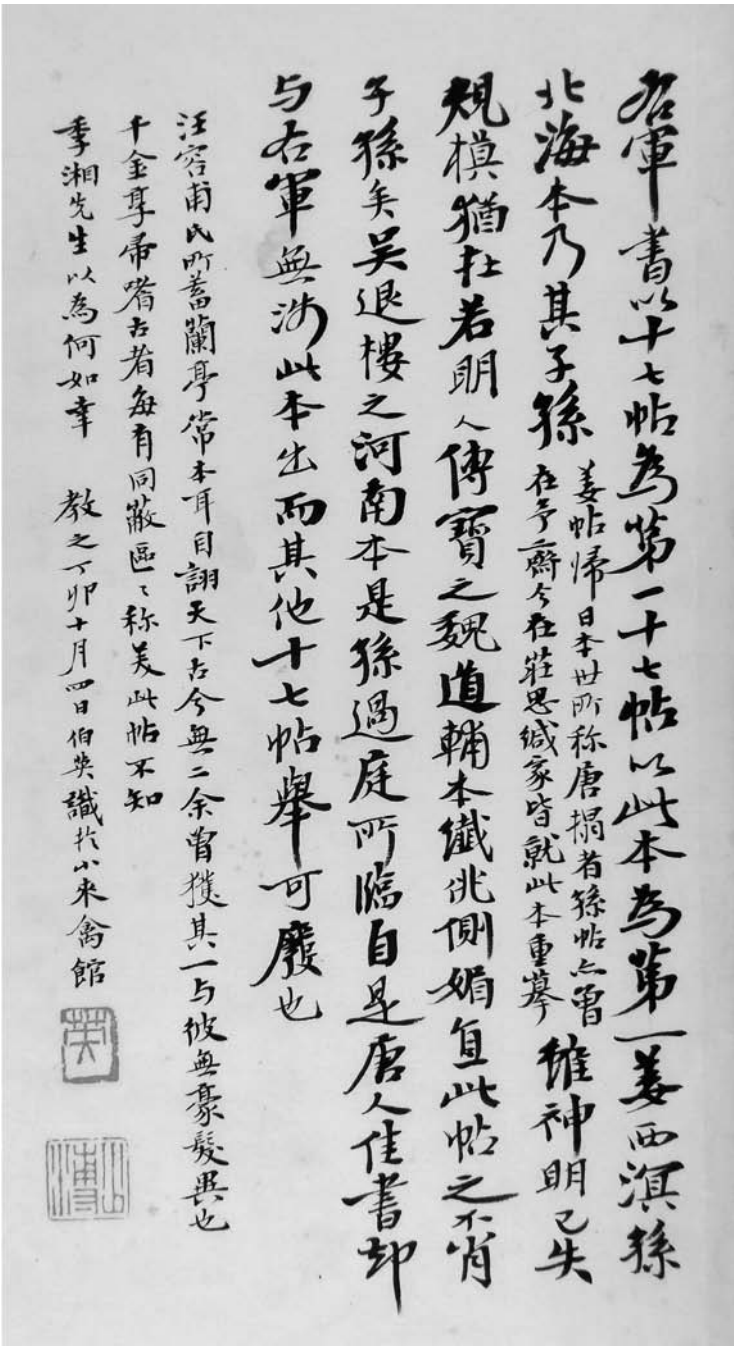
図①「右軍書範」題簽

図②—1「宋拓十七帖」巻頭部分（やや縮小）

王羲之の草書を収録した「宋拓十七帖」の民国年間の影印本である。この原本は、現在上海図書館に所蔵され、中国に所蔵される宋拓十七帖の最も有名な帖である。この帖は、清朝の皇帝の所蔵であったが、清末に民間に流れ、優れた金石家である張伯英（1871～1949字は勺圃、東涯老人と号す、江蘇銅山の人。書を善くし、歴代碑帖の善本を数多く収蔵し、60才以後は碑法帖を専門に研究し、『法帖提要』などの著作を残し、清末民国期の碑法帖研究・収蔵の第一人者である）に帰した。中華民国十六年（1927）、張



図②—2　（図②—1より続く・やや縮小）



右軍書十七帖為第一十七帖以此本為第一姜西溟孫北海本乃其子孫姜帖帰日本世所称唐搨者孫帖亡曾在予齋今在莊思緘家皆就此本重摹雖神明已失規模猶拙若明人傳寶之魏道輔本鐵兆側媚自此帖之不肖子孫矣吳退樓之河南本是孫過庭所臨自是唐人佳書却与右軍無涉此本出而其他十七帖舉可廢也

汪容甫氏所蓄蘭亭常本耳自謂天下古今無二余曾獲其一与彼無豪髮異也千金享帝眷古者每有同嚴匿と称美此帖不知季湘先生以為何如幸　教之丁卯十月四日伯英識於小來禽館

図③　「宋拓十七帖」張伯英跋文（やや縮小）

伯英は、この『十七帖』と『此事帖』（伝王羲之の墨跡模本）を1冊にまとめて『右軍書範』と名付けて商務印書館に制作を依頼して、個人出版として刊行した。図版に示したのは、この張伯英が個人出版した影印本である（図②）。これを1927年に季湘先生なる人物に贈ったものである。本文は石印印刷であるが、後半の白紙の部分に、贈呈のために自筆で跋文を書き付けている（図③）。刊行時の印刷題簽でなく後の旧蔵者が書き付した題簽が付されている（図①）。重厚な八分隷であるが、落款はない。跋文は張伯英の伸びやかな楷書に行書を取り入れた書風である。内容は、この宋拓十七帖は、数ある十七帖の中で最も優れたものであり、当時影印本され有名であった姜西溟本（現在京都国立博物館所蔵の『上野本宋拓十七帖』をさす）や他の多くの十七帖拓本は、この張伯英蔵本よりも劣るものである。

伊藤　滋　メールアドレス
mokkei@galaxy.ocn.ne.jp

書道芸術院
平成の群像（2014）

前田龍雲

「回想」

お習字は5歳で始めた。一緒に遊んでいた近所のお兄ちゃんお姉ちゃんが通っていた教室について行った。そして興味をもって入会。最初は親に連れられてというのが定番かもしれないがそうではなかった。「習いたい」と志願したわけだ。どうしてそう思ったか未だに思い出せないのだが、幼いながら何か心に響くものがあったのだろう。教室にはたくさんの生徒がいるのに私語ひとつなく、静かで凛とした雰囲気であったのは今でも覚えている。

その教室の中西淀蘭先生が川崎梅村先生（恩地春洋先生の師）社中の先生であったことがわかったのは何年も過ぎてからである。何が縁かわからないが母や伯父叔母たちは学生時代、川崎先生の教室に通っていた。

中西先生は常に「継続は力なり」と仰っていた。小さいころから外で走り回っていた私だが、なぜかその空間が落ち着いたので知らない間にさぼりながらでも続いていた。小学校高学年では訳の分からないまま王羲之や顔真卿の臨書手本を渡されて書いていた。これは高校まで継続。かな作家の中西先生であったが常に漢字の臨書をしておられた。しばらくしてお年で亡くなられた。

高校時代、芸術の授業で書道を選択した。ここで出会ったのが幸田博明（号鐵游人）先生。川崎梅村先生のご子息吾一先生のご学友だ。そして当時の高校書道教育界のドンである。

学校一厳しく怖い先生というのがもっぱらの噂であったが私には全くそうは映らなかった。何よりも書が好きで熱狂的な阪神ファン。阪神が勝つと翌日の授業はご機嫌で声のトーンが違っていた。ニックネームは『顔真卿』。「何を書いても素晴らしい作品」と学校の先生方も絶賛されていた。芸術はもとよりいろいろなことに造詣が深く暑苦しいほどの熱血漢で人間味溢れる先生に引き込まれていった。「こんな楽しい授業はない。」「こんなに書道って面白く奥が深いもの。」と教えていただいた。休み時間には書道準備室に呼んでいただきいろいろなお話が聞けた。そしてその頃、少しでも幸田先生に近づきたいとの思いで書の道に進もうと決意。その先生が常に口にされていたのが「臨書しいや～」である。ここでいつも臨書されていた中西先生を思い出す。刻字も篆刻も幸田先生に教えていただいた。驚いたことに、後でわかったが晩年に中西先生が書道芸術院展などで使っておられたのは私の拙作落款印である。

幸田先生に「書の道に進むなら公募団体を経験した方がよい」と言っていただいたので大学の2回生ころに恩地春洋先生の門をたたいた。

恩地春洋先生は中西先生に習っていたころに何度かお顔を拝見したことがあった。温厚篤実なのは皆様周知の通り。この教室には川岸春艸・小林白萩・小林琴水先生など、春洋会の先輩方がおられた。ここで大学のゼミのような3年間の臨書講座を受けた。やはり「臨書」だ。そして平行して書道芸術院展や毎日書道展に出品するようになり、新たな世界の楽しさ・厳しさを教えていただいたのがまさに平成時代だ。頑固な性格ゆえ、遅々として進まない自分を改めて今、認識する。さぞ恩地先生は歯痒い思いをなさっているに違いない。

今まで思い返すと「臨書」が常に付き纏っていた。これからも「臨書」の鍛錬は欠かせない。そしてなによりどれだけたくさんの方々にお世話になったことか。忙しさを言い訳に不義理ばかりしているが、感謝の気持ちを忘れず、「倍返し」とはいかないが、少しずつお返ししながら生きていきたいと思う。

（平成25年12月記）

『生』 第6回壘土舎展（2012年） 180×120cm

頌春

甲午の歳のはじめに

明けましておめでとうございます。

本年創立67年目を迎えます。2月には昨年より新装なった東京都美術館を舞台に第65回記念の全国学生書道展を併催して第67回書道芸術院展が開催されます。

今回展より展覧会運営、特に審査会員作品に対する賞をこれまで35有余年続いた「峰雲賞」を発展的に改称し、「書道芸術院春華賞」として新たなスタートを切ることとしました。また、審査会員候補作品に対しても、書道芸術院大賞、同準大賞、白雪紅梅賞に続き「書道芸術院俊英賞」を秋の秋季展の「秋季俊英賞」と並列して設けました。

その他夏の講習会は久しぶりに和歌山県高野山にて開催、秋季展は移転が決まりました東京セントラル美術館（2月より銀座紙パルプ会館5階）での開催と、例年同様さまざまな行事が予定されております。公益財団法人として2年目をむかえますが、会員の皆様のご支援、ご協力をいただきながら前へと進んで参りたいと思います。この1年宜しくお願いいたします。

平成26年元旦

公益財団法人書道芸術院理事長　辻元大雲

役員一同

書のひろば

理事長　辻 元 大 雲

平成26年　甲午の歳を迎えて

明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします。

昨年は66回書道芸術院展、毎日展は記念すべき65回展でした。現代の書新春展を皮切りに様々な展覧会もありました。特筆すべきは高木聖鶴先生の文化勲章ご受章、フランスパリでの「SHO2 現代日本の書代表作家100人展」を国立ギメ東洋美術館で盛大に開催できたこと。特別展の「手島右卿の書芸術＝その世界性」の意義ある展覧、東博での「書聖王羲之」など枚挙に暇がありません。

秋深まる頃突如報道された「日展審査問題」は我々書に関わる者にとり以前から囁かれていたことでしたが、マスメディアがいろいろ報道を繰り返すなど、大変な反響を呼んでいます。このことは一人日展書のみならず、広く芸術文化の在り様を改めて問い直す必要を感じさせます。書道芸術院展、毎日書道展もしっかりと襟を正していかねばと思います。67回書道芸術院展はすぐそこに迫っており、会員諸氏のご協力ご支援をお願いします。

新しい年を迎えました。お互い健康に留意し、よりよい一年でありますようお祈りします。

毎日書道会理事会開催
66回毎日書道展主要役員決定

昨年12月13日、一般財団法人毎日書道会定例理事会が開催され、平成26年度事業計画、同予算、66回展主要人事などが決定した。

第66回毎日書道展は昨年同様東京国立新美術館と東京都美術館両会場を使用して開催される。ほぼ65回展と同じ態様で開催されるが入賞数、当番審査員などは64回展に戻して行われる。

＊改革される主な点。

U23の出品作品審査はこれまで通り別枠で行い、一般公募会友の入賞基礎数への反映は今回展より行わないことになった。検討されつつあるその他の改革案は今後継続して67回展以降の実施に向け改革委員会が検討。

＊企画展示

大規模な特別企画展は65回での「手島右卿展」で一応の区切りとし、今回展では「毎日展　国際文化交流の足跡」と銘打ち、これまで長年にわたり行ってきた海外展、書を通しての文化交流の足跡を振り返る企画展示を行う。作品展示は国立ギメ東洋美術館での「SHO2 現代の書代表作家100人展」を前後期2期に分けて展示する予定。

本企画の実行委員長は辻元大雲が担当する。

＊主要人事（敬称略）

66回展実行委員長　船本芳雲

同　審査部長　中原志軒
同　総務部長　山中翠谷
同　陳列部長　渡部會山

＊運営委員（院関係）

種谷萬城（漢字）　大野祥雲（大字）
後藤大峰（刻字）　千葉蒼玄（前衛）

＊名誉会員推挙　鳥山岳風（刻字）他

＊規定による審査会員昇格

竹本龍汀（漢字）　川島舟錦（大字）
三宅　梵（刻字）　大石仙岳（前衛）

＊特別選考による審査会員昇格

名越蒼竹（漢字）　牧　泰濤（漢字）
勝山初美（かな）　橋本玉扇（近詩）
稲垣小燕（大字）　福島李舟（前衛）

＊規定による会員昇格

（漢字）奥原翠嵐、菊地昌春
（かな）清水喜代子、髙井順子
（近詩）赤羽恵舟、北嶋菁湖、
　　國嶋一春、佐藤初香、
　　三宅佳峰
（前衛）小野寺三枝、佐々木蓮峰、
　　三木彩月

＊特別選考による会員昇格

（近詩）小原華杏、国吉真雲
（大字）唐岩碧水
（前衛）鈴木楽洋

＊会友昇格　略

＊その他の事業計画

・2015現代の書新春展開催
和光会場・東京セントラル100人展
（セントラル美術館は会場が紙パルプ会館5階に2014年2月より移転）
・2015毎日チャリティ書展開催
会場　東京銀座画廊美術館
・第23回国際高校生選抜書展
2015年2月大阪市立美術館にて
・第11回国際書法交流バンコク大展
2014年8月中旬　バンコク市内

高野山書道協会理事会開催

12月1日　品川高野山東京別院にて開催され、第49回展開催に向け主要役員、日程などが決定した。

＊第49回高野山競書大会主要役員

審査長　辻元大雲
審査副委員長　種谷萬城（主任）他
運営委員　小竹石雲ほか
当番審査員（院関係）
辻元大雲、小林琴水、下谷洋子

＊高野山開創1200年記念献書事業

2015年4月に記念事業が各種計画されており、以前1150年の折に行われた献書事業を今回も行うこととなった。今回は全日本書道連盟が中心になって献書出品者の選考、推薦を行うことになっており、招待作家、推薦作家の2本立てで行われる。

＊招待作家　全日本書道連盟役員及び各書道団体の主要メンバー150名前後を選考し表具代などは本山側負担。

＊推薦作家　全日本書道連盟維持団体、賛助団体その他より毎日書道展審査会員、読売展理事以上の希望者を募り自己負担による表具にて献書していただく。詳細は本年3月ごろ決定予定。

「TOKYO書2014」アーティストトーク

1月13日(月・祝)13：50～　種谷萬城

21世紀の書
―私の主張―

漢字(四)

崎井恵風

3・11の鎮魂「追弔」「魂」

平成23年の書道芸術院秋季展・推薦作家展に選ばれ、一人5mの壁面を自由に使って作品を発表させていただく好機に恵まれました。東日本大震災が起って間もない頃でした。前代未曽有の大惨事、黒い津波の恐怖は今でも脳裏から離れません。報道される惨状を目にする度に胸が痛みました。犠牲になられた方々の鎮魂を「追弔」で表現しました。広い壁面に合わせて90×240㎝の大作に想いを託しました。想いが強過ぎて力の入り過ぎた作品になりました。「魂」も同時期に制作したものです。テーマを「祈り」で統一しました。大震災一ヶ月前に亡くなった母の事も重なり、一生忘れられない発表の機会でした。この場を与えていただき感謝しています。

2011書道芸術院秋季展「魂」

崎井恵風書

「追弔」　崎井恵風書

かな(四)

田子白嶺

大字のかなに思うこと

現代書は展覧会を主に、数種の分野で活動されていますが、かなも会場の広さに応じて大字の作品が多くなりました。古筆は高度に完成されたものですが、現代の大字がなは新たに工夫されたもので、古筆との条件の違いから異なる要素をもっています。

一、料紙を必要なだけつなぎ、必要な所で切る、というのでなく、作品ですから最初から限られた紙の面積内で大字として構成し、作品としての条件（起承転結の変化、主要点の設定、書美表現等）を満たすこと。

二、古筆のような多字連綿はできません。これは、文字の構造から連綿線は斜線となる事が多く、また一行の構成上、文字の終点から次の起点までの距離が長くなることもあり、これらが大字で多く連綿されると、この連綿線が特に目立ち、美的に逆効果になると思います。また書には「リズム」があり、このことからも適度に切ることは必要と思います。

三、作品として字幅の変化や、疎密の変化は古筆より多い。

四、使用される漢字は動的な唐様を用いることも多いですが、線のリズムや線質を他の文字のそれに合わせ、その場に応じて造形も工夫します。

五、大字がなとして、力強く、変化と躍動感のある作風も多くあります。

六、古筆よりも複雑な変体がなを入れることも多く、流れや疎密の変化、主要部の設定に効果的と思います。

毎日巡回群馬展出品作品（180×60㎝）

田子白嶺書

書道芸術院創立記念日
特別公開講演会

平成25年11月23日(土・祝)
於　上野精養軒

「書へのいざない」

講師　　貞政少登先生

〈公開講演会〉

理事長　辻元大雲

本院創立は昭和22年11月23日、戦後の混乱の渦中に産声を上げ、戦後いち早く現代書への挑戦を高らかに歌い上げ誕生した。この良き日を記念して講演会など特別な企画、行事を毎年行ってきた。本年は本院でご活躍され、現在は公益財団法人独立書人団の相談役として後進の育成に多方面で活躍されている貞政少登先生をお招きし、「書へのいざない」と題し数々のエピソードを取り混ぜお話しいただいた。

先生は独立書人団創立の師、手島右卿先生のもと厳しい内弟子修行を経て、様々な艱難辛苦を乗り越えてこられた。今回のお話は先生の九州での出自から始まり、如何にして書の道を志し自らの強い信念を抱き続けてきたかを訥々と時に厳しい眼差しで、またユーモア溢れる話し口で予定の1時間半はあっという間に過ぎ去った。

先生は北九州市門司区にお生まれになり、小学校入学の後太平洋戦争が勃発、戦火をくぐり抜けながらご卒業、門司工業学校に入学、終戦を迎える。その後書道担当教師として赴任された森本耕雪先生に出会い書の道を示される。書道部活動や地区書道連盟活動など14歳から18歳に至る間書道への関心を高められたという。結局卒業後は上級学校への進学を断念し、「書」の道一本へ進むことを決意され上京、手島右卿師のもとで内弟子となられた。時に18歳。内弟子修行は3年間続けられ後独立する。第3回毎日書道展へ19歳内弟子時代から出品、入選入賞を重ねられた。この内弟子時代より手島先生の懐刀として存在感を増し、手島に貞政あり、独立に貞政少登ありと世に認められるようになったという。

また、東京芸術大学に「書道科」設置の気運が盛り上がった折、手島先生の情熱溢れる設置への期待と努力に大いに傾倒しその運動を進めるべく努力されたという。事実、貞政先生は東京芸術大学の美術学部聴講生を一年、更に同大書道部講師をご担当されたという。特に工芸家漆芸の吉田左源二先生とご交誼を得たことなどその後の先生の諸活動に大きな益を得たことなど、お話の内容は多岐にわたり、時間が足りなくなるほどであった。

また先生直筆の手島先生に宛てた履歴書（素晴らしい細楷）をご持参いただき、更に第3回書道芸術院展特選入賞の賞状などもご持参くださりご披露頂いたことも参加者にとり驚きの一幕であった。

この講演の助手としてお出でいただいた独立書人団理事の大森哲先生は私の地元、木更津の地で同じ高校書道教師としてお付き合いいただいている方で、現在木更津総合高校で書道、国語の教師を務められている。

講演後、恒例の懇親会を会場の上野精養軒3階光の間に移し、200名余の会員と共に両先生にご参加いただき和やかに、全国の総支局の活動報告を交え歓談の輪は広がった。

講師の貞政少登先生（手前）と
助講師・大森　哲先生

〈懇親会〉

三浦鄭街

今年夏の毎日書道展での特別展示『手島右卿の書芸術―その世界性』が開催されました。今回の講演会は独立書人団相談役の貞政少登先生から師匠手島先生のお話を直接伺うことができ、大変興味深い内容でした。終了後、恒例の懇親会を行いました。

懇親会は(公財)書道芸術院 辻元大雲理事長の挨拶に始まり、記念講演講師貞政少登先生のご挨拶、顧問の先生を代表して恩地春洋先生の乾杯。とても和やかな雰囲気の中、全国13の総局支局長の先生方から、来年の行事予定、展覧会等のご案内が紹介されました。北は北海道、南は九州まで書道芸術院は全国各地から集まっている団体である事を再認識いたしました。

来年の単位認定講習会は関西総局が担当で小林琴水総局長から「和歌山県の高野山で平成26年8月23日(土)～24日(日)に開催します。皆様奮ってご参加を。」と案内がありました。

新年1月4日から東京都美術館で「TOKYO書2014」の出品者 種谷萬城、坂本素雪、後藤大峰の各先生からご挨拶、1月5日から毎日書道会主催「現代の書 新春展」、2月から5月開催に変更になった「現代女流書展」それぞれの出品者の先生方の紹介もありました。その他、各地で開催されるグループ展の紹介もありました。

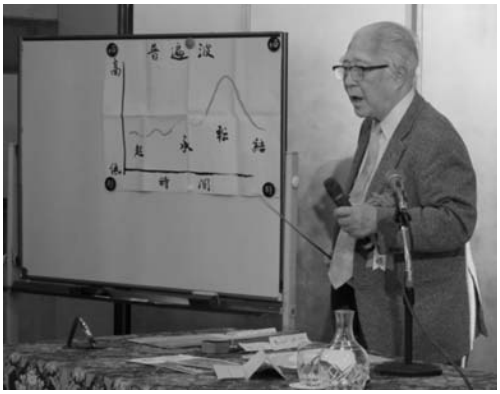
常務理事の下谷洋子先生の中締めによりお開きとなりました。

第67回書道芸術院展を2月に控え、昨年より全国学生書道展が併催され一大イベントとなりました。それぞれの担当部署が着々と準備を進めている中での懇親会はとても充実した楽しい一時でした。

事務局次長として司会進行の大役を任され、皆様のご協力により無事終了出来ました。ありがとうございました。懇親会の報告といたします。

(写真 前田龍雲)

貞政少登先生を紹介する辻元理事長



さまざまな資料で分かりやすくお話しいただいた

熱心に聞き入る受講者

大勢で賑わう懇親会

辻元理事長の挨拶

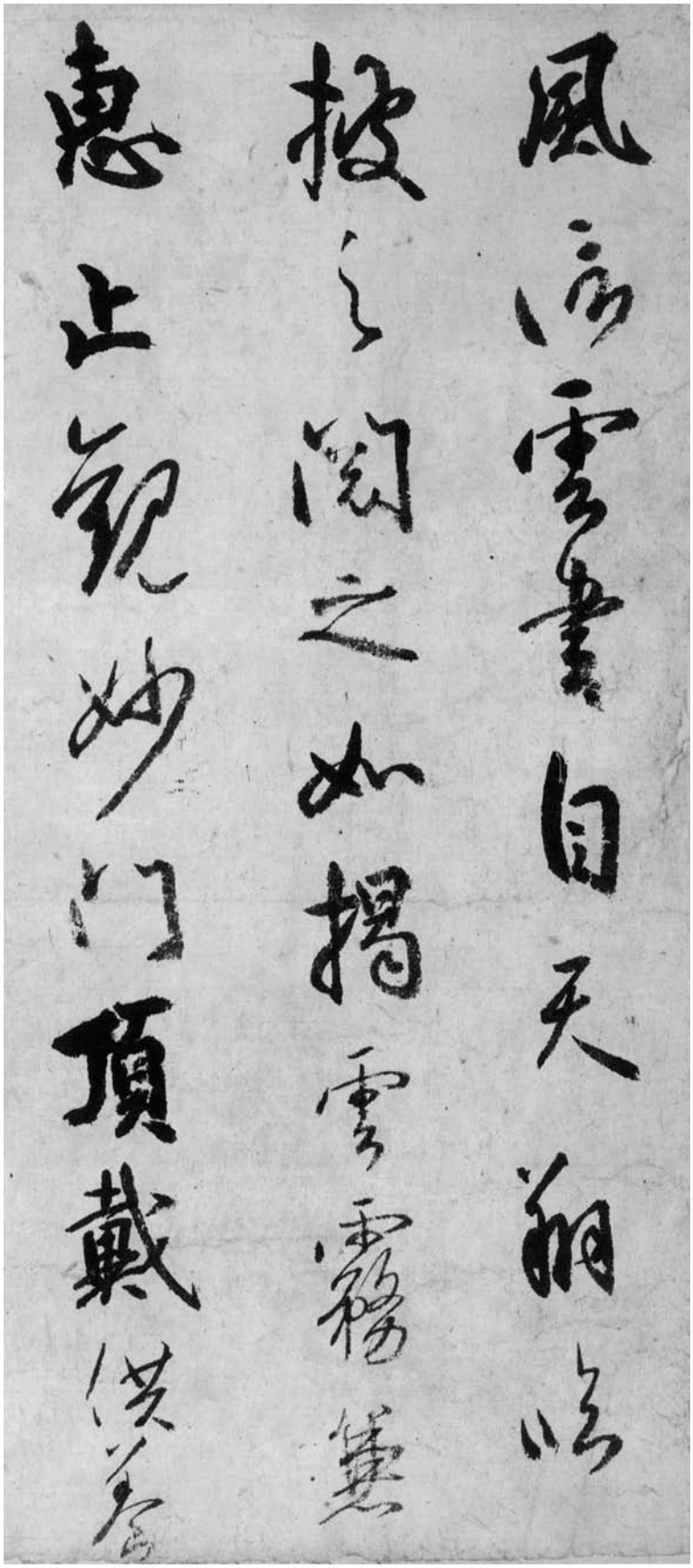
風信帖（空海）①

漢字研究部臨書課題 ＝（半紙普通判・縦使用）左記の法帖より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題 ＝（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）左記の掲載以外も可。

※落款を必ず入れる
署名、もしくは〇〇臨
（押印のみも可）

〈解説〉 作者である空海（774～835年）は弘法大師の名で知られる真言宗の開祖。日本天台宗の開祖最澄（伝教大師）とともに、旧来のいわゆる奈良仏教から新しい平安仏教へと日本仏教が転換していく流れの劈頭に位置し、中国から真言密教をもたらした。日本の王羲之ともいうべき不世出の能書家であり、中国では五筆和尚といわれ、日本では入木道の祖と仰がれ、その重厚で装飾的な書風は大師流といわれている。また嵯峨天皇・橘逸勢とともに三筆と称された。（編集部）



風信雲書、自レ天翔臨。／披レ之閲レ之、如レ掲二雲霧一。兼／恵二止観妙門一、頂戴供養、

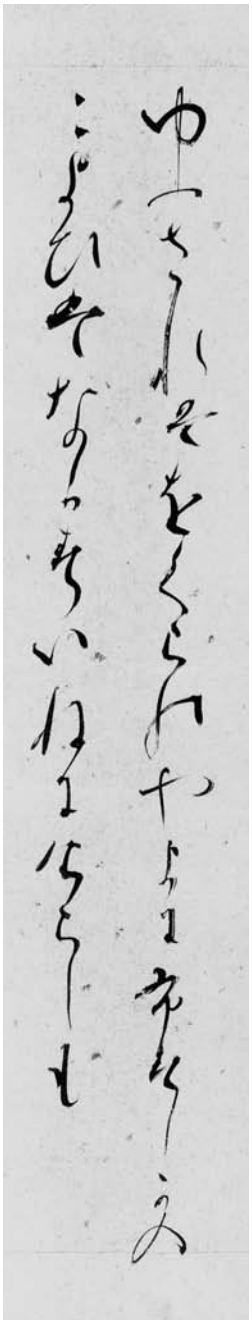
（78%縮小）

古筆鑑賞

藍紙本万葉集（伝 藤原公任）①

⑱

〈よみ〉ゆふされば(盤)をぐらのやま(久能)にふすしか(尓布春可)の
こよひはなかずいね(尓介)にけらしも
いもが(毛可多)ためわれ(多)たまひろふおきつなる(於支川奈)
たまもち(多末毛)よせよおき(於支)つしらなみ(那三)
あさぎり(利尓)にぬれ(尓)にしころもほさ(保)ずして(春)
ひとりやきみ(可)がやまぢこゆらむ(无)



（70%縮小）

（70%縮小）

（70%縮小）

〈解説〉

藍の染料で染め上げた繊維を、水中に溶解させて漉きあげた料紙の色によって藍紙本と呼ばれ、万葉集が書かれている。古筆家の間で、藍地万葉集と称されていたため、佐々木信綱が新たに「藍紙本」と命名した。

料紙はさらに、銀砂子を撒き、行の天地を揃えるために上下に薄墨で横界が1本ずつ引かれている。

装丁は巻子本で、もとは20巻あったが、現在は巻9・10・18のみで、巻9は完全な巻物、巻18は全て断簡、巻10は4行と5行の断簡が1枚ずつ残っている。

巻9の巻末には奥書があり、わずか4日間でこの1巻を書写したことが書かれている。筆者は藤原公任と伝わったが、今は、藤原伊房（行成の孫）の真跡と判明している。十五番歌合・尼子切などと同筆である。

藍紙本と、桂本・金沢本・元暦校本・天治本の5つを、平安時代の五代万葉集と呼んでいる。

この時代の万葉集は、全て男手（漢字の楷・行書）の歌に女手（かな）の歌を並べて書写している。

（今回は、かな部分のみ掲載しました）

（編集部）

かな研究部臨書課題

- 競書作品は、左の古筆の掲載部分より**歌一首以上を書く。（全臨も可）**
- 用紙は**半紙普通判（料紙可）**
  〈**たて長**に使用〉
  別紙を裁断して貼付も可。
  半懐紙は半紙サイズに切って使用のこと。

特別研究部臨書課題

- 毎日展公募サイズ以内・縦横自由
- 左記の掲載以外も可

※落款を必ず入れる
署名、もしくは
○○臨
（押印のみも可）

漢字規定　初段以上【二月十五日締めきり】　用紙　半紙普通判

大野祥雲選書

山呼萬歲聲　よみ（山は呼ぶ萬歲の聲）

書体＝自由

習い方解説（四）

大野祥雲

山呼萬歲聲（武帝紀）
（山は呼ぶ萬歲の聲）

長寿を祝福することば「万歲」は、本来は酒を飲んだとき、相手の健康・長寿を祝して大声で言ったという。後になって酒なしでも、めでたいときには「万歲」と言うようになったとのこと。「山は呼ぶ、万歲の声」は漢の武帝の寿を祝って、臣下一同が「万歲」と叫んだところ、それが山々にこだました。という故事に基づく。

「山」3本の縦画の大きさ、方向などに注意し、気脈の貫通が大切。

「呼」口の接筆を離す。終画の左側には余白をとって明るく。

「萬」向勢に形をとって穏やかに。運筆は息永く食い込む線で。

「歲」各所に白をとること。戈法は直線的な線で紙を切る。

「聲」耳部をやや細めに書き、その左右に余白をとって明るく。

漢字規定　秀級以下【二月十五日締めきり】用紙　半紙普通判

名越蒼竹選書

智者可巻　よみ（智者は巻くべし）

書体＝楷書

習い方解説（四）

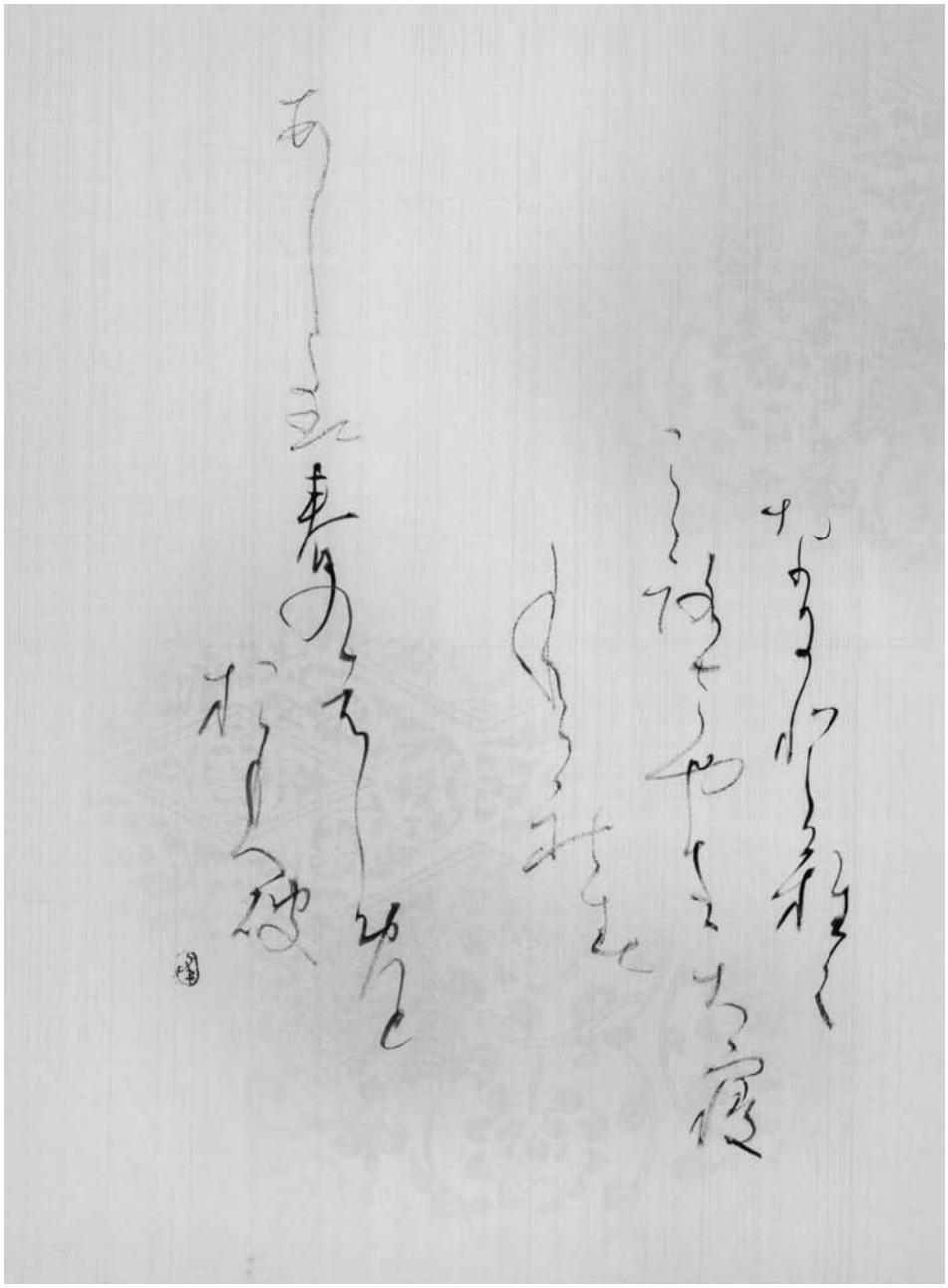
名越蒼竹

智者可巻（李白）
（智者は巻くべし）

この言葉は「智慧のある人はそれをむやみに表に出さない」という意味です。今月も北魏の書風ですが、鄭道昭の「鄭羲下碑」を参考にしました。鄭道昭の楷書は円筆（点画に円みがある筆使い）と言われますが、子細に観察すると部分的に方筆らしきところも見られます。摩崖碑なので本来は方筆であったものが円筆に見えているのかもしれません。ただ私たちが習うときは円筆の書としてその書法を会得するのがよいと思います。起筆は筆をねじ込むようにして懐広く字形を整えるのがよいでしょう。ハネやハライも最後まで力を抜かないように気をつけてください。

かな規定 初段以上【二月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判（料紙可）

平川峰子選書



よみ方　なに(尓)と(登)な(難)く(久)こゝろ(路)さやぎ(支)て(天)寝ね(年)られ(礼)
ず(春)あした(多)は(盤)春のは(者)じめ(免)とお(於)もへば(破)

創作

習い方解説 (四)

平川峰子

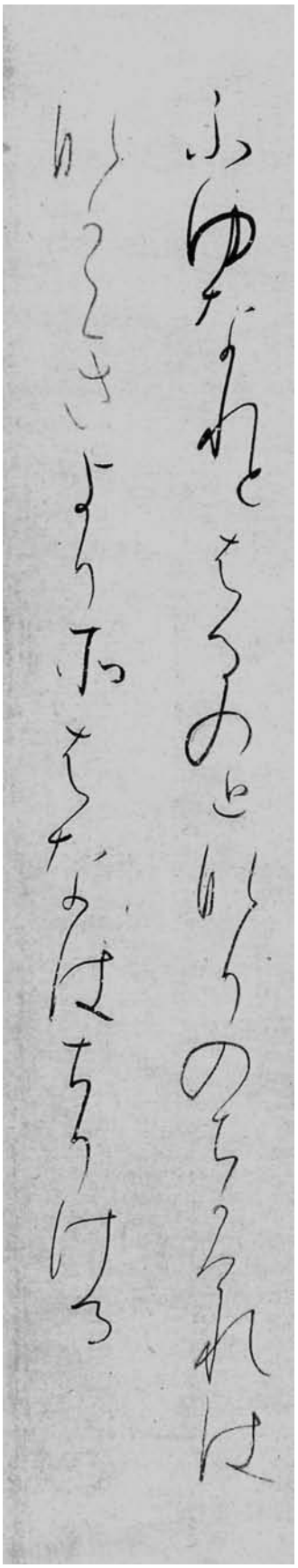
何となく心さやぎて寝ねられず
明日は春のはじめと思へば
（良寛）

かなのリズムはどうすれば表現できるのでしょう。書く速度を速くしたり遅くしたりするとリズム感は出せそうな気がしますがそれだけでは理解されにくいでしょう。速いと見える線も実はゆったりとした速度で引くのがコツです。そして、筆の先のその先まで神経を行き届かせながら細くしたい時には筆先を真上にかつ垂直に吊り上げながら紙から離していきます。そして、太い線にしたい時には筆を紙に沈めていきます。

最初はスローモーションビデオのようですが、それがだんだんリズム感のある線条になっていくのです。かなは筆の先の先、その一本を命毛と言いますが、その名の通り命毛を大切にしながら生きた線を作っていきましょう。

かな規定　秀級以下　【二月十五日締めきり】 用紙　半紙タテ1/2（料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真のうたを全臨、または部分（二字以上の連綿）を臨書する。



高野切第三種
（掲載写真縮小93％）

よみ方　ふゆなれどは(者)るのとな(那)りのちか(可)け(介)れば
な(那)か(可)ゞきよりぞ(所)は(者)なはちりける

かな条幅規定【二月十五日締めきり】 用紙　小画仙紙半切（料紙可）

和氣しげ代選書

よみ方　何とな(那)く(久)心さ(佐)やぎ(支)ていね(年)られず(寸)
あ(安)し(新)た(多)は(者)春のは(八)じ(志)め(免)と思へば(盤)

創作

習い方解説 (一)

和氣しげ代

何となく心さやぎて寝ねられず
明日は春のはじめと思へば
（良寛）

新年を迎える喜びを詠んでいます。嬉しい気持をイメージします。墨量が多すぎると重く感じるので気をつけてください。

文字に大小の変化をつけ、連綿を入れて、動きを出します。2行目の「はじめ」で含墨、墨色の変化をつけます。

※たて形式に限る

漢字条幅規定　初段以上【二月十五日締めきり】　用紙　小画仙紙半切

牧　泰濤選書

早鶯懐舊随時至　芳艸無情著處新
（早鶯舊を懐いて時に随いて至り、芳艸情無く處に着して新なり。）

書体＝自由

習い方解説（四）

牧　泰濤

甲午新年ご多幸の年であります様に。気分一新ということで、ゆっくり、墨量豊かに行書体主に書いてみました。

「墨を用いるには須らく潤い有らしむべし。枯燥ならしむべからず。尤も穠肥を忌む。（董其昌）」墨を使うには潤いが大切。渇れてカサカサはいけない。だからといって太ってブヨブヨも不可ということ。

漢字条幅規定　秀級以下【二月十五日締めきり】　用紙　小画仙紙半切

竹本龍汀選書

懐古欽英風
（古を懐いて英風を欽う）

（李白）

書体＝自由

習い方解説（四）

竹本龍汀

今回は5字句1行です。褚遂良の枯樹賦の筆致で書いてみました。文字を字典で集字しないで、日常の枯樹賦の臨書で感じ取ったリズムで書きました。

遠くから筆を入れる遠勢、懐を広くおおらかに、筆の赴くままの自然な抑揚の変化を楽しみながら、粘りのある線で気持の良い流れが出るように心掛けました。文字の大小と中心が通るように注意して書いてみて下さい。

ペン字規定【二月十五日締めきり】

三浦鄭街選書

龍門石窟を訪ねて古陽洞に入った
時、ドーム上の壁一面に彫られた仏像
と造像記を見た。それらの彫りの
鋭さと素朴な力強さに魅了され、
しばしただずんだ。　○○書

用紙＝はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体＝自由

習い方解説 (四)

三浦鄭街

造像記と言えばすぐに思い出されるのが龍門二十品である。河南省洛陽の南13キロに、伊水をはさんで対峙する龍門山と香山の岸崖には、数千の造像記が刻されている。それらの中から北魏の名品二十種をよりすぐって、書の手本にしたのがいわゆる龍門二十品である。

今回は0・38㎜の細い水性ボールペンを使って、余白と爽やかさを意識して書いてみました。

芸術新聞社発行『図説　中国書道史』書道史概説より抜粋

※**落款**を必ず入れる。
（**自分の名前**を入れること）

今月のホープ作品各部総評 NO.631

漢字部　師範　土屋　里美

歯切れよい筆致の行書表現。柔毫筆使用による飛白がリズムを醸し出し、紙面に動きを与えている。

◎漢字部総評　上級5文字表現安定作多く好感。草書の字形に要注意。下級楷書は書風の多様な変化を古典臨書等で身につけたい。（大雲評）

漢字条幅部　師範　前多　滋笠

渇筆を多用し、軽妙に筆が動き熟達した技量が窺える。余白が美しく、品性の高い上質な行草書。

◎漢字条幅部総評　上級作品は、多様な表現が見られ、楽しく審査した。文字調べも着実にしているが、誤字も見られた。（萬城評）

現代詩文書部　特選　工藤　山房

感性豊かな作者です。句に合わせた墨色、構成と余白の美しさ、そして筆致。見事な作品です。

◎現代詩文書部総評　字形のデフォルメは、やり過ぎると品格を失う作品となるので注意。（素雪評）

かな条幅部　師範　長谷川千峰

無理のない字組みで自然に運び、柔らかなタッチが風情を醸す。転折の用筆と墨継ぎの位置一考を。

前衛書部　特選　山田　明子

直線的で鋭い書線で構成され、充実した魅力ある作となっている。2画目先が長いか更なる努力を。

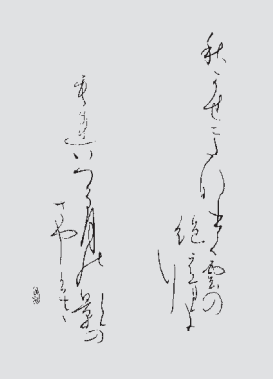
◎前衛書部総評　様々な傾向の作が増え頼もしいが、更に高い創造力で新鮮な作を望む。（仙草評）

◎かな条幅部総評　横形式は行の動きのバランスが難しいためか、行間、上下の間などに配慮の欠けるものが多かった。（洋子評）

かな部　師範　森下　祥泉

伸びやかな線で、作品を明るく大きく見せています。古筆美をとり入れながらモダンな趣で大成功。

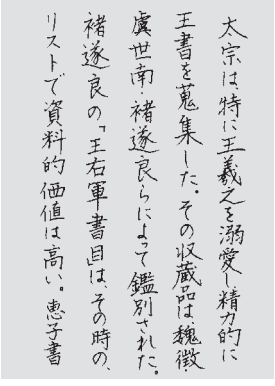
◎かな部総評　手本拡大が未熟な作も見られたが、概、よく研究し、独自の工夫を加えていた。雅印を含め、紙面を美しく！（明子評）



ペン字部　師範　鶴田　恵子

1字ずつ丁寧な筆致に、懐の広さが加味されており、漢字の多い課題だが流れも布置も見事な作品。

◎ペン字部総評　全体的に楷書で運筆、気字が大きく、流れも工夫した良い作品が多く、大変喜ばしいこと益々のご精進を。（和楓評）

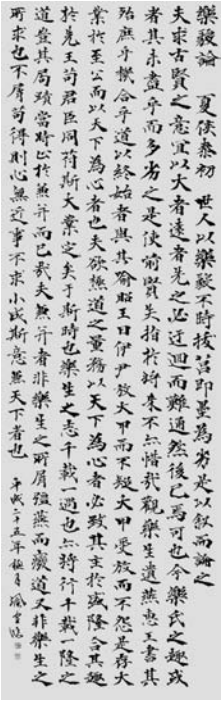


今月の

特別研究部優秀作品（特選）

臨書（東庄）岩井颯雪

「光明皇后楽毅論」



岩井颯雪臨

174×54㎝

◆光明皇毅論の特徴をよく捉えて充実の作。太細の変化も原帖をよく観察し、努力の作である。（大雲評）

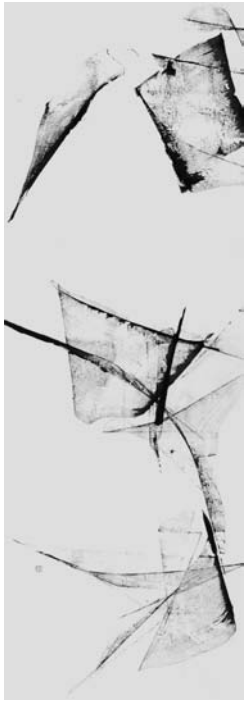
◆筆先が小気味よい程躍動し、小字ながら大きな世界を感じさせる。臨書を自分のものとしていて敬意。（洋子評）

◆一字一字迫力がありこの大量の文字を一枚の紙に収め見事。欲をいえば字の大小に少々注意を。（倫子評）

◆筆端が空間を大きく動き原帖の雅趣をわがものとしている。光明皇后の人間性が彷彿とする好臨。（翠風評）

前衛書（蓮紅）田村紅沙

「無題」



田村紅沙書

180×62㎝

漢字（大雲）小川白舟

「漢詩」

小川白舟書

174×55㎝

◆菘翁の〝白玉井銘〟に甘みを加えたような魅力的な作。作品に対坐していると心が静まるようだ。（翠風評）

◆墨色のすばらしさに目をとられる。太い線、細い線で表現していくに従い墨色が生きてくる。（倫子評）

◆筆では表現できない線。その線にかすれを立体的に見せてくれる濃い線が一際強く効果を上げている。（倫子評）

◆モダンアートを感じさせる斬新な作。鋭い直線表現と柔らかく広がる渇筆がうまく調和している。（大雲評）

◆独特の青淡墨の情感を生かし、細やかなリズムでしっとりと味わい深く表現して妙。格調高い作。（大雲評）

◆宿墨か、美しい墨色に淀みのないリズムで知的な香りが燻る。派手さはないが、しみじみと魅せる作。（洋子評）

◆マチエールによる偶発性を生かした作品。現代建築の中にも異和なくフィットしそうな作である。（翠風評）

◆独自性に富み目を引く。特殊な用材で渇筆が彩のように層を成し、鋭い直線との組合せも意表を突く。（洋子評）

現代詩文書（白弦）佐藤弦佳

「俊太郎の詩」

87×88㎝

佐藤弦佳書

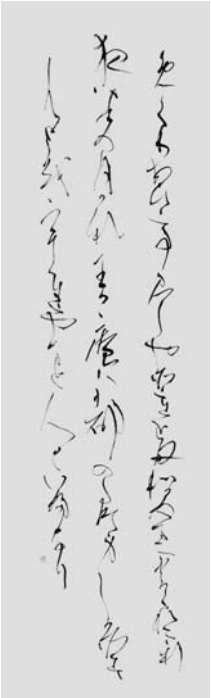
◆やや濃墨で柔毫筆の弾力を活かし、太細の変化で微妙なリズムを醸し出す。中央部の盛り上りも自然。（大雲評）

◆超長鋒を駆使して太細をリズム化し、緩やかなだ円形で統一をとる。自然な気の流れが条条とする。（洋子評）

◆墨の濃淡を上手に変化して表現されている。円形にまとめ、筆の動きで豊かさが現われている。（倫子評）

◆「音符」「旋律」「トレモロ」等の語句から触発されて生まれた線質と思う。響きの高い作品である。（翠風評）

かな（高崎）小峰美加子「めぐりあひて」



180×53㎝

小峰美加子書

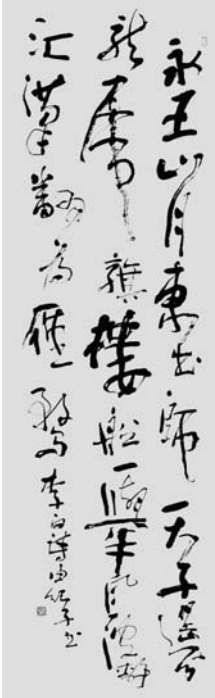
◆文字を正確に理解した上でのリズムに乗った運筆が白眉。バランス感覚に優れ、筆が生きている。（洋子評）

◆和歌二首を三行構成に、あまり大きな変化はないが響き高い線質、リズミカルな連綿など実力派。（大雲評）

◆思わず口ずさみたくなるような筆の運び。その流れで全体を一つにくるむような動きはすばらしい。（倫子評）

◆百人一首の有名な二首を読み易い変体がなを用い流麗に書き納めている。各行相互の語り合いも見事。（翠風評）

漢字（AI）清水由紀子「李白詩」



176×53㎝

清水由紀子書

◆飄逸な雰囲気が全体に広がり、楽しく味わいある作。大小の変化のバランスも面白く錬達の作。（大雲評）

◆心に詩をきざみつつ筆を運ぶ姿が目に浮ぶ感じ、細い線の鋭さがにじむ太い線と違和感なく表現。（倫子評）

◆含蓄のある線質は会津八一を連想させる。細線にやや弱さを感じるのが残念だ。（翠風評）

◆かなりデフォルメした造形が、違和感なく調和するのは手慣れているためか。動きの豊かさが楽しい。（洋子評）

創作の部（42点）
漢字―12点
かな―6点
現代―14点
篆刻―0点
前衛―10点
臨書の部（22点）
漢字―20点
かな―2点

総出品点数 64点

〈特選候補者〉

（創作の部）
「漢字」
もく 森田 藤谷
奥田 小林 純風
「かな」
八街 井上 芝雲
「現代詩」
翠柳 鈴木 翠夢
千葉 澤田 雙鶴
游水 荒川 空華
「前衛」
秀恵 阿部 稚悠
湘南 佐藤 詠子
山王 鈴木 春江
（臨書の部）
「漢字」
英峰 渡邉 多佳
英峰 佐藤 桂香
澄春 土屋 恵仙
千葉 竹浪 叙舟
「かな」
若葉 工藤 山房

漢字研究部（楽毅論）

選評　名越蒼竹

今月のホープ作品

浴森洋子

漢字研究部　特選　浴森　洋子

起筆から終筆まで神経の行き届いた素晴らしい臨書です。線に潤いとつや、そして張りがあります。混戦の上位作品の中で、骨力の点で他にまさっていました。6字の配字も良いですが、落款（特に印）の位置は一考を要します。

◎漢字研究部総評

課題のせいか細字の臨書が多く見られ、その質はこれまでの中で高い方でした。今回は4字臨書よりも6字臨書の方がまとめやすい課題だったと思います。臨書の場合第一にその特徴を表現しなければなりませんが、似顔絵を書く時のように多少誇張することもコツの一つです。ただ観察をやめてしまうと枚数を重ねるうちに品格が落ちてきます。何度も観察を重ねましょう。今回は一部用筆が顔法そのものになってしまったものがありました。

信香　裕風　香人　涼規　祐子　友香里

華香　炎谷　翠梨　里美　陽秀　秀玲　美陽　香生

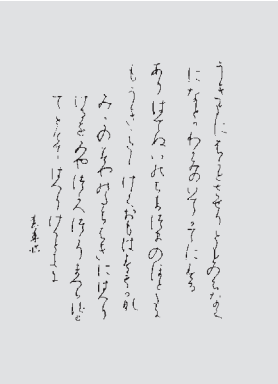
桂子　蘭舟　宥雨　春景　由美子　宗子

祥美　恵理　千芳子　扇咲子

かな研究部
（高野切第三種）

選評　庄司紅邨

今月のホープ作品

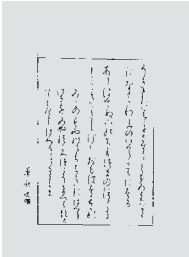


宇田川　春華

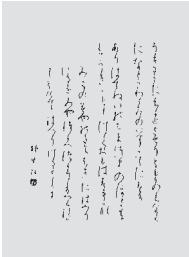
仮名の名筆の代表でもある高野切第三種を落ちついた線の抑揚で書けています。リズム、間のとり方等作品からにじみ出て、素晴らしい仕上りです。

◎かな研究部総評

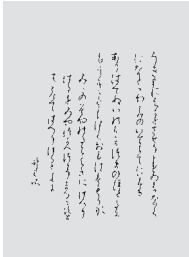
臨書の技法として、漫然とまねて書いてはいけません。原本の字形、墨つぎ、量と共にきちんと模倣する事が大事です。三種のよどみのない書きぶりを知って下さい。



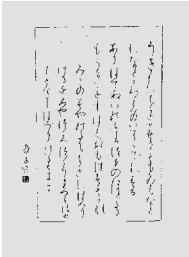
草真博　秋紀舟



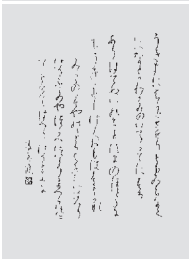
幹耶藤　生衣漣

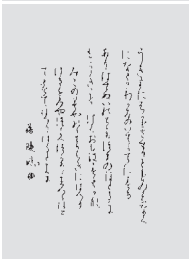


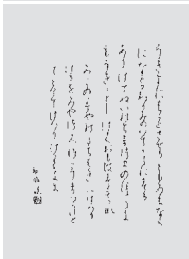
タ香初　ケミ風風

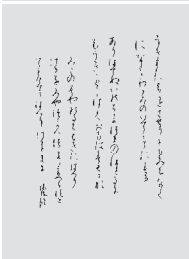


哲か楊　っえ風　子









かな研究部成績表

かな研究部　特選　宇田川春華

特選

澄春　碗水　東葉　戸伯　宇宮　田村　飯戸　小遊　墨も　枝風　洞〃　清紅　椿竜　蒼雲　玉秀　た生　玉秀　立　秀

春　澤　中高　木中　青田　真　庭　佐沼　玉　藤　藤　月書　瑤翠　泉　溪陽　松大　歌　敢　葉　千八　秀

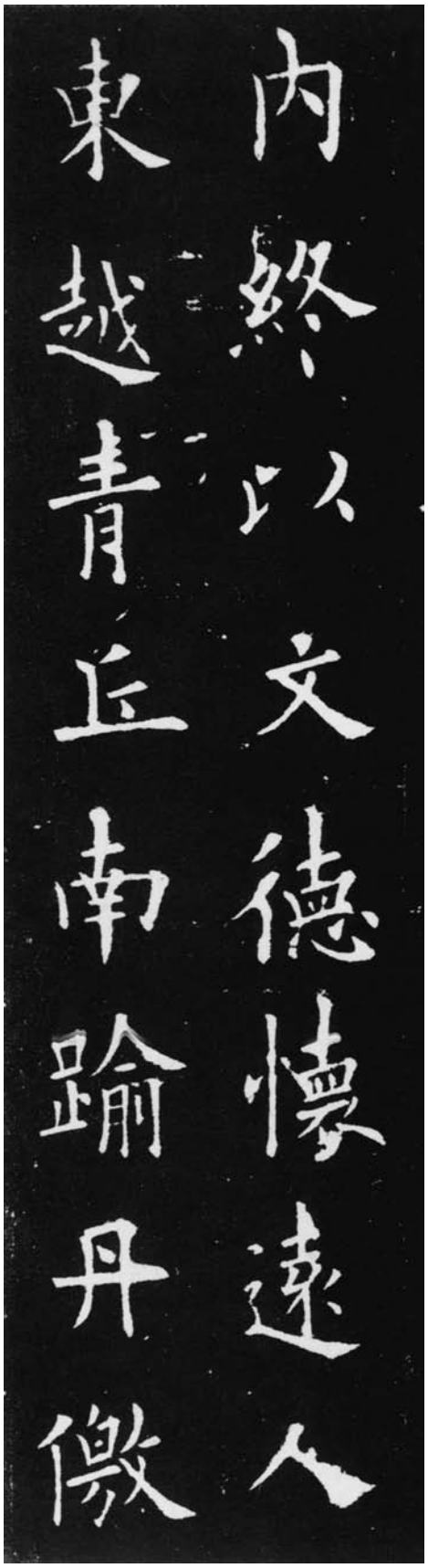
宇　川　本村　高　木　飯　山　真　ケ　タ　哲　香　楊　つ　え　風　ミ　藤耶幹　草真　秋紀　博舟　真　博　理　紫　光　藤　鶴　千　野　浅　新　市　猪　今　岩

春　華　秋　舟　博　幹　耶　藤　生　衣　漣　草　真　秋　紀　博　舟　真　理　紫　光　雪　彩　翠　恵　千　恵　游　雅　代　智　広　夫　風　風　ミ　藤　耶　幹　博　真　草　春　華

〔特別昇級試験臨書課題〕

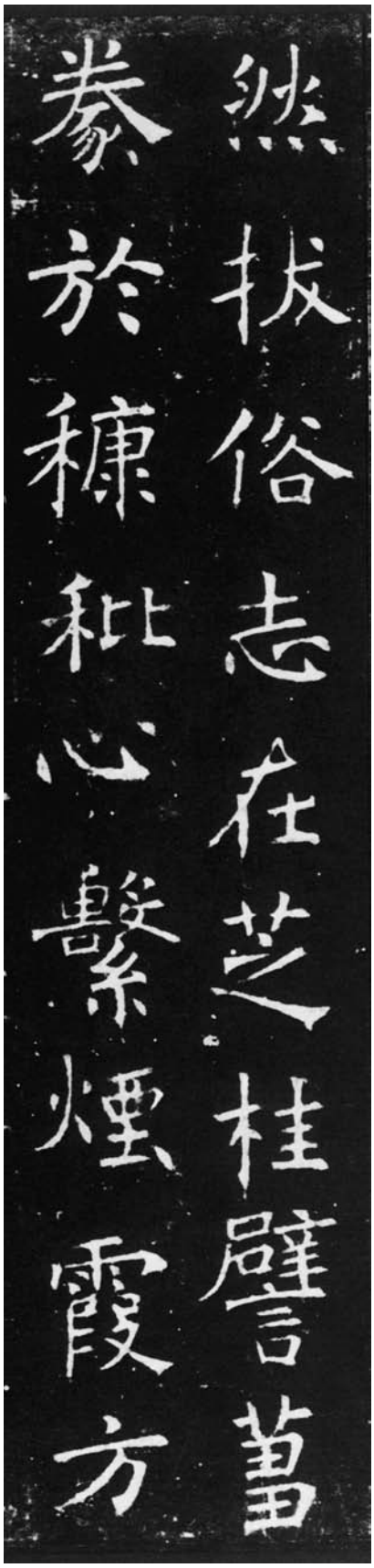
※左記の写真掲載部分の中から規定の文字数を臨書する。
掲載以外は違反となります。

九成宮醴泉銘（楷書）　漢字部　第一種　半紙に写真掲載の中から4文字を臨書



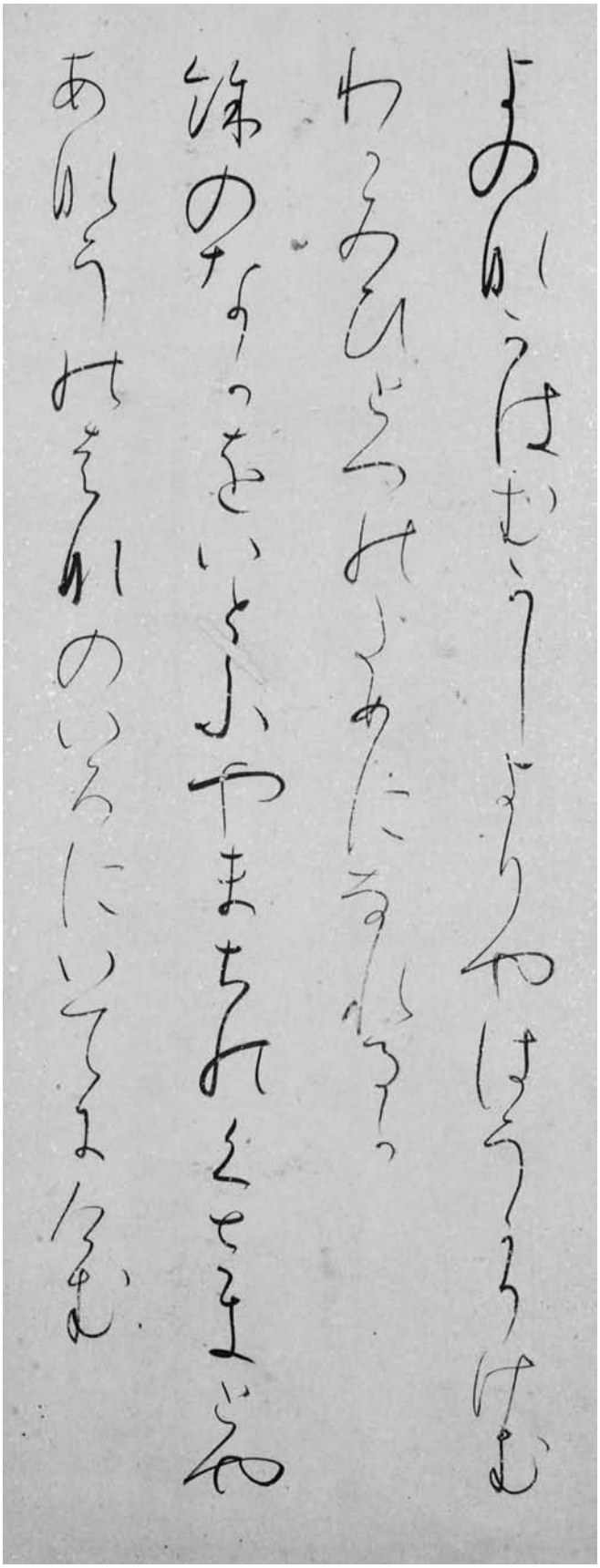
內。終 以二文 德一懷二遠 人。／東 越二青 丘。南 踰二丹 徼。

孟法師碑（楷書）　漢字部　第二種　半紙に写真掲載の中から4文字を臨書

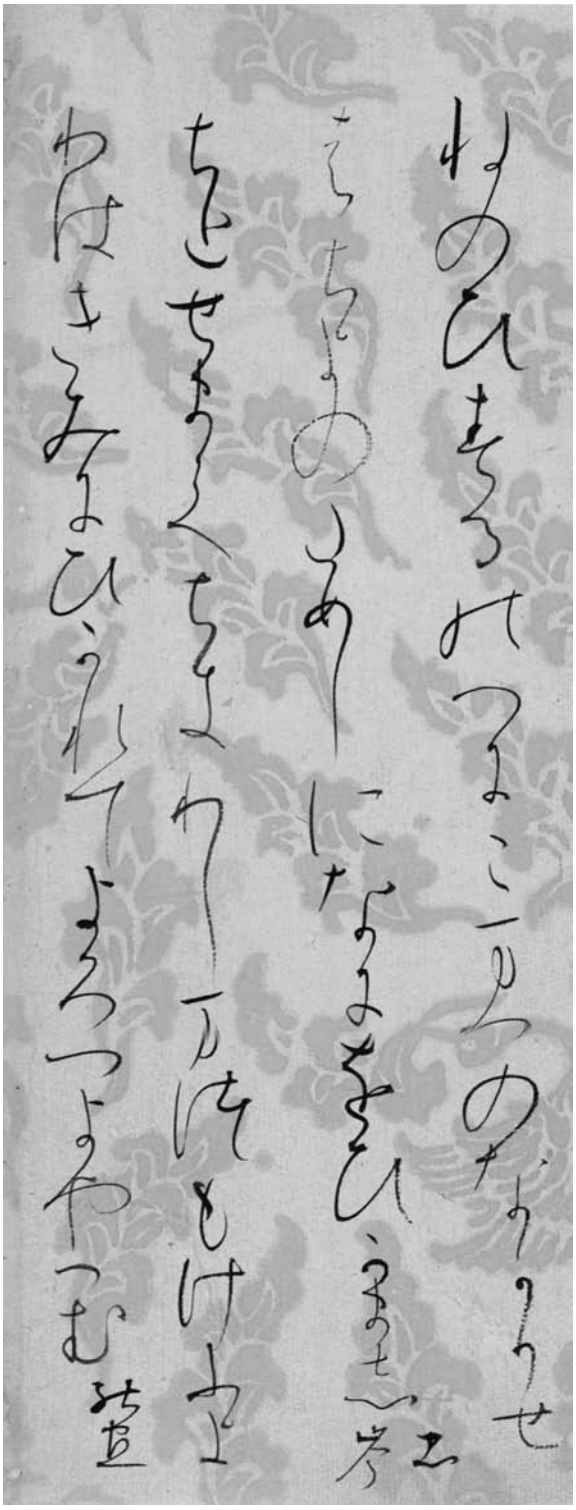


然 拔レ俗。志 在二芝 桂一。譬 蓊／鬱 於 穠 秕一。心 繁二煙 霞一。方二

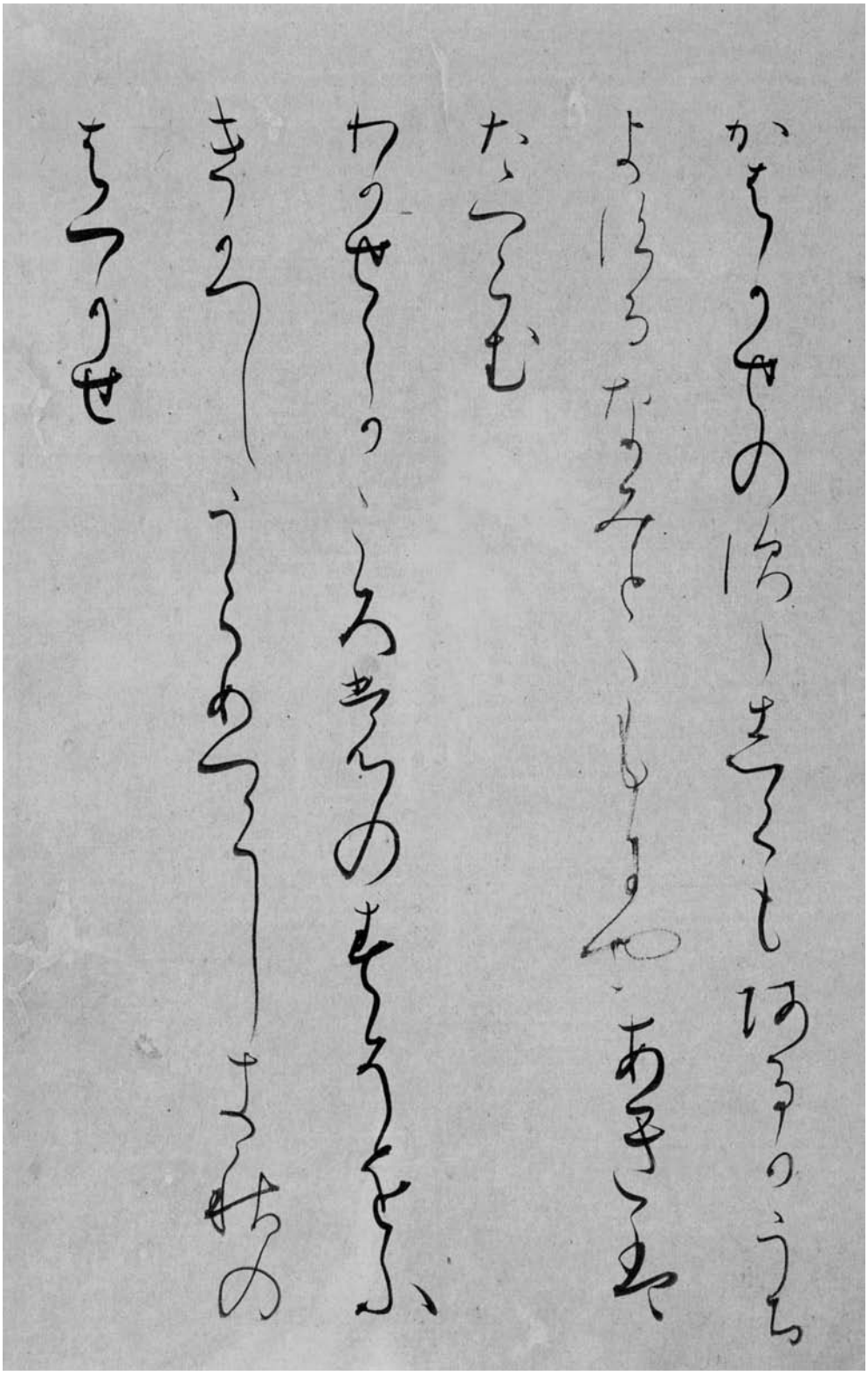
高野切第三種　かな部　第一種　半紙に写真掲載の和歌・二首を書く（料紙可）〈93％縮小〉



よのなかはむかしよりやはうかりけむ／わがみひとつのためになれるか
よのなかをいとふやまぢのくさきとや／あなうのはなのいろにいでにけむ



ねのひするのべにこまつのなかりせ／ばちよのためしになにをひかまし忠岑
ちとせまでちぎりしまつもけふよ／りはきみにひかれてよろづよやへむ能宣



かはかぜのすゞしくもあるかうち／よするなみとゝもにやあきは／たつらむ
わがせこがころものすそをふ／きかへしうらめづらしき秋の／はつかぜ

寸松庵色紙　かな部　第三種　半紙に枠をとり写真掲載のうたを書く

（たて12.7センチ×よこ12.4センチの枠を半紙に書いて、その中に書くこと）

（料紙可）　※落款は右枠内でも枠外でもかまわない　〈原寸大〉

きのあきみね（支見年）

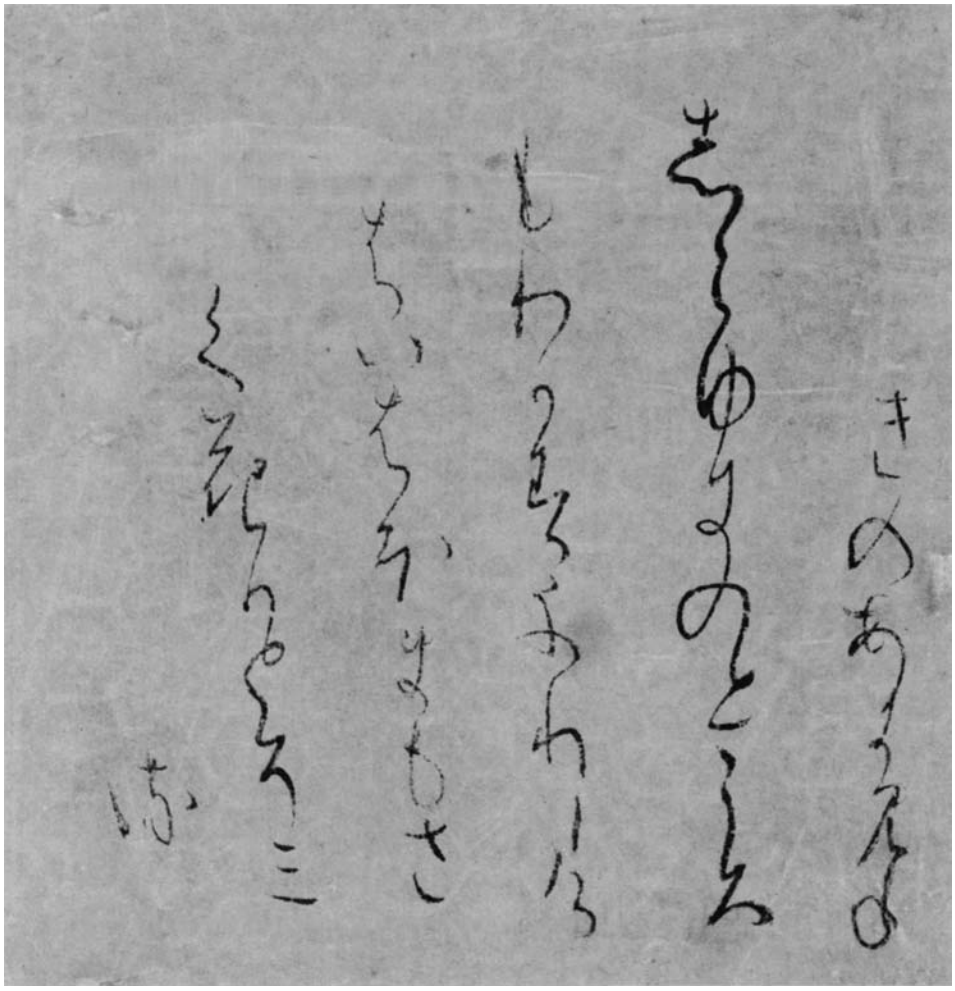
しらゆきのところ（志支）

もわかずふりしけ（可春利介）

ばいはほにもさ（者者本尓）

く花かとぞみ（久可三）

る（流）



牛橛造像記（楷書）

漢字条幅部

第二種

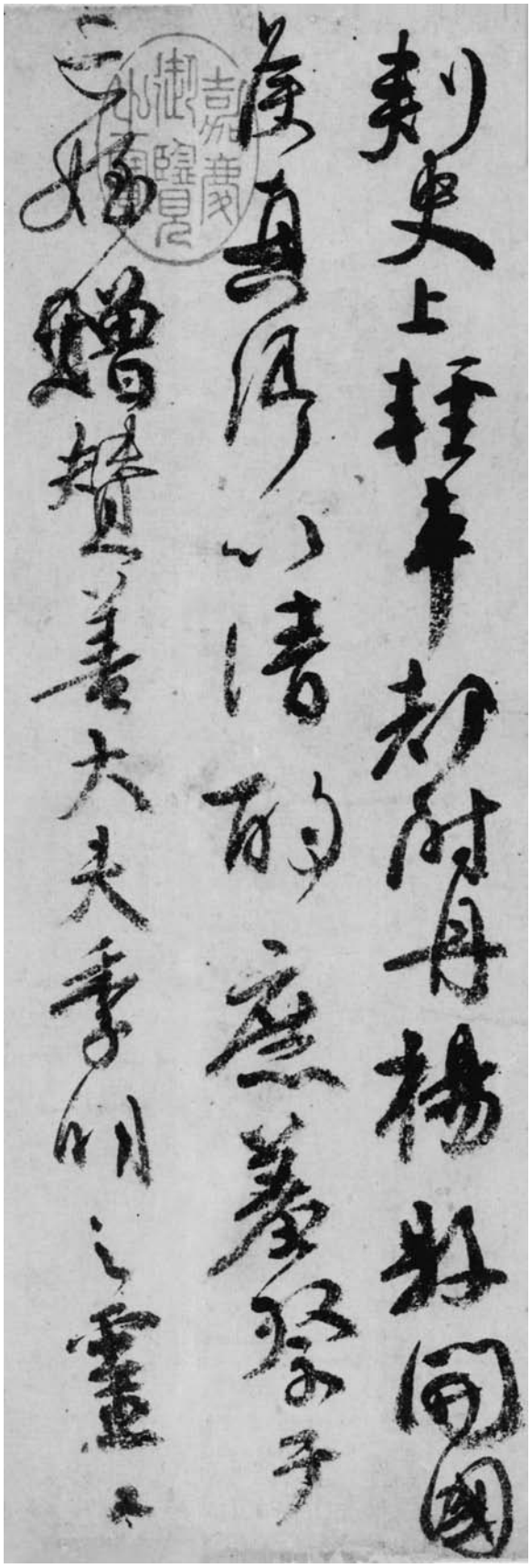
半切に写真掲載の中から14文字を臨書

上諸佛之所。若生／世界。妙樂自在之／處。若有苦累。即令

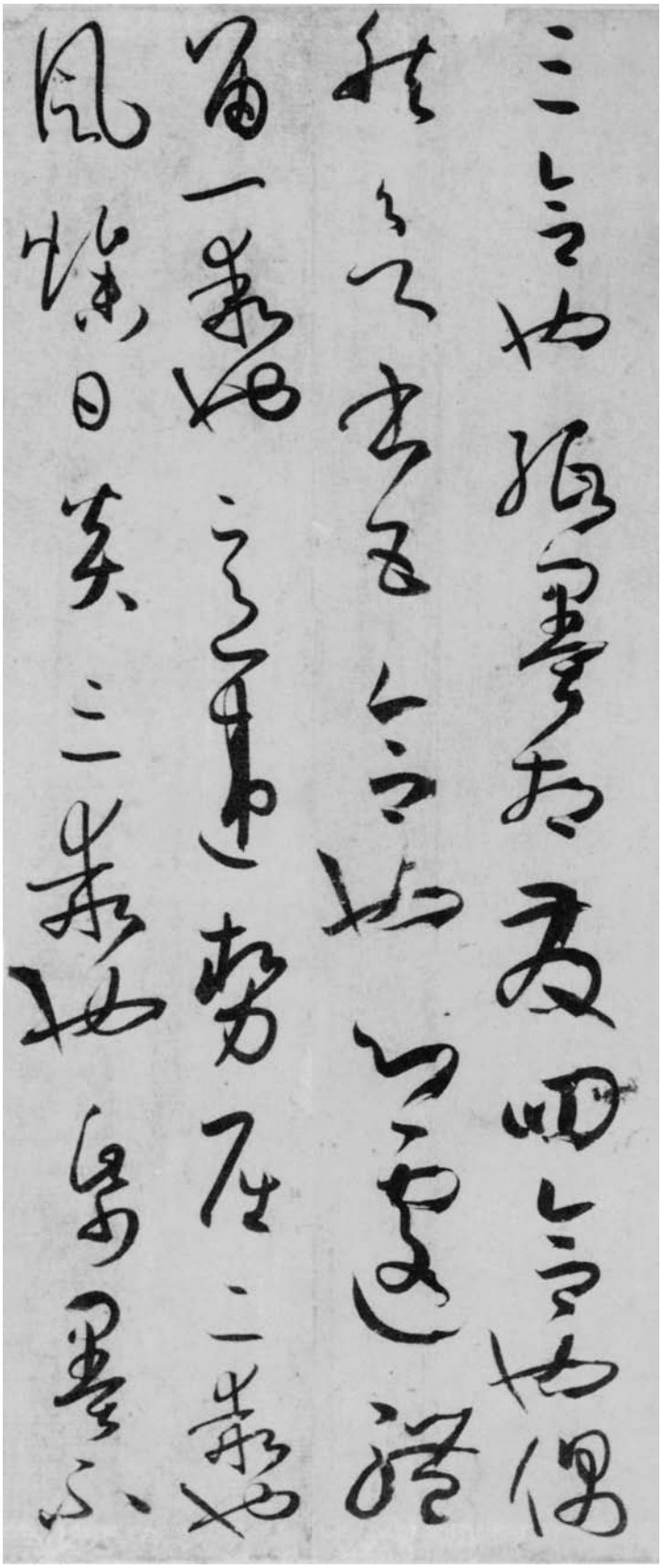
祭姪文稿（行書）

漢字条幅部　第三種

半切に写真掲載の中から20文字を臨書



刺史・上輕車都尉・丹楊縣開國／侯・眞卿。以二清酌庶羞一。祭二于亡姪・贈贊善大夫・季明之靈一。



三合也。紙墨相發。四合也。偶／然欲レ書。五合也。心遽體留。一乖也。意違勢屈二乖也。／風燥日炎。三乖也。帋墨不レ